

Men and Women who were seen through
Cross-Dressing(2) : the Legend of Female Pope

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤阪, 俊一 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1028

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



異性装から見た男と女(2)——女教皇伝説

Men and Women who were seen through Cross-Dressing (2)

—— the Legend of Female Pope

赤 阪 俊 一

AKASAKA, Shunichi

はじめに

カトリックは男性の宗教である。こう書くと、おそらく即座に反論が出る。まずはマザー・テレサの活躍、多くの聖女の存在、そして何よりもなおカトリック信仰におけるマリアの大きさがその反論として提出されるはずである。しかしそれにもかかわらず制度としてのカトリックは男性中心である。

つい最近に至るまで女性の司祭は存在しなかった。いや、特殊な事情で女性司祭が誕生したものの、正式には認められていないという。¹ 司教、大司教、枢機卿に至っては現在も全員が男性である。何よりも受品者に独身を誓わせるのは、女性との接触が男性たちを墮落させるとの観念を人々に植え付けることになる。こうして女性をケガレの源泉と考える心性が醸成された。あえて意地悪く見ると、女性をケガレの源泉と考えているがゆえに、こういうことが制度化されたともいえる。

カトリックの位階制度の中でトップにあるのは教皇であるが、ある時期、教皇は、その登位にあたって、穴のあいた椅子に座らされ男性であることが衆目の見守る中で確認され

なければならなかったと信じられていたという。²

これはかつて一度女性が教皇座に就いたが故の手續きだったと解釈された。もちろんこの女性は女性として教皇座に就いたのではない。男装し、男性として学問を修め、男性として教会のヒエラルヒーをのぼりつめ、そして教皇になったのだ。今回は、この女教皇の話を通して、中世における女性と制度としての教会のかかわりを考えていく手がかりを提供する。

1 伝説の発生

1250年ごろ、³ メッツのドミニコ修道会士ジャン・ド・マイリが『メッツ世界年代記』の中に次のような物語を書き込んでいた。おそらくこの記述が女教皇の初出である。

某教皇あるいはむしろ女教皇について調査のこと。というのは（この教皇は）女であり、自らを男に擬し、教皇庁において才能の高さで有名となり、ついで枢機卿となり、最後に教皇となったのであるから。ある日、馬に乗っているとき、子どもを産んだ。そして直

キーワード：異性装、女教皇、中世ヨーロッパ
Key words : cross-dressing, female pope, medieval Europe

ちにローマの正義でもって、彼女の両足が縛られ、馬の尻尾に（くくりつけられ）、引きずられ、人々によって半リーグの間、石を投げられた。そしてその場所で死に、同所に葬られた。そして同所に次のように書かれた。

ペトルス、父の中の父よ、女教皇の出産をあばけ。

同教皇のもとで、四季大齋日が制度化され、そして（それは）女教皇の断食といわれている。⁴

ジャンは女教皇の存在について半信半疑であったに違いない。冒頭のことばがそれを示している。にわかには信じがたいものの、何らかの資料あるいは伝承が存在したにちがいないことをこの冒頭のことばが推測させてくれる。

『メッツ年代記』が書かれた数年後、同じくドミニコ修道士エティエンヌ・ド・ブルボンが例話のひとつとして女教皇の話を書いた。彼の次のような叙述をジャンの叙述と比べていただきたい。

諸年代記中に語られていることに従えば、驚くべき大胆不敵（な事件）、というかむしろ狂気が1100年ごろに生じた。十分に教育があつて、書く技術において学識があつたある女が男装し、男と見なされた。彼女はローマにやって来、活力と教養のゆえに好意を持って迎えられた。彼女は教皇庁の公証人に任命され、それから悪魔の手助けにより、枢機卿に叙任され、そしてついには教皇に選出された。彼女は妊娠し、パレード中に子どもを産んだ。ローマの正義がこの出来事を知って、彼女の足は縛られ、彼女は馬の脚に結び付けられ、馬は彼女をローマの外まで引きずった。

そして彼女は半リーグにわたって人々によって石で打たれた。彼女はまさにその死んだ場所に葬られ、彼女の遺体を覆った石の上に次のような言葉が書かれた。

注意せよ、父の中の父よ、女教皇の出産をあばくことを。⁵

そのような大胆不適さがどのように嫌悪すべき結末を導き出すかに注意せよ。⁶

両者において、石碑のことばは細部において異なるし、何よりもエティエンヌによると、彼女が教皇になったのは悪魔の助力が与っていた。しかし大筋においてはよく似ており、同一資料を利用したか、あるいはエティエンヌがジャンを参照したと考えられている。⁷

このふたつの文書は逸話として読まれたようであり、歴史事実とは考えられていなかったようである。女教皇の話が人々に知られ、急速に事実と化していったのは、以上の二人と同時代の人であったマルティヌス・ポロヌスという人物が『ローマ教皇と皇帝の年代記』を書き残したからである。⁸ このマルティヌス氏、ポーランドのトロパウ生まれであり、ジャンやエティエンヌと同様、ドミニコ修道士であった。ローマにやってきて留保罪聴罪師兼教皇用礼拝堂付き司祭となった。⁹ 彼はその地位のゆえに自由にバチカンの文書館を利用できたであろうし、またそれゆえに彼の著作の信頼度は高く、ほぼ公的な記録と見なされたようである。そのため彼の書いたものがいかに荒唐無稽であっても、人々は事実として信じたようなのである。まさにそのような文書に誰かが女教皇の記事を挿入したのだ。

その当該箇所を訳出しておく。

このレオのあとに、マグンティヌスMaguntinus 生まれのヨハネス・アングリクスが2年7ヵ月と4日間在位してローマで死去し、教皇位は1ヵ月間空位であった。この人物は、申し立てられているごとく、女であった。そして少女時代、恋人amasiusによって男装させられ、アテネに連れて行かれた。さまざまな学知 scientia において秀で、その結果、彼女と同等と思われるものは誰もおらず、ことにその後、ローマにおいて、三科を講義し、たくさんのマグステルを弟子や聴講者として持った。そしてローマにおいて、生活と知恵において、大いなる評判であったので、全会一致で教皇に選ばれた。しかしながら在任中に友人familiarisによって妊娠させられた。出産の正しいときを知らず、聖ペトルス大聖堂からラテラン宮へとパレードをおこなっている間に苦しくなって、コロッセウムと聖クレメンツ教会の間で出産し、死後、同所に葬られたといわれている。そして教皇陛下がその道をしばしば避けるので、きわめて多くの人々によって、教皇がその行為の呪いのゆえに、これをなすのだと信じられている。女がこのことにかかわったという大きな醜聞のため、(彼女は) 聖教皇座リストの中には載せられていない。¹⁰

マルティヌスにおいて、始めてこの女教皇の名前と出身地が明らかにされた。またアテネで勉強したこと、ローマにやってきて、その学識のゆえに出世したことなどが述べられている。マルティヌスの記述は前二者に比べて具体的であり、後世への影響の高さも肯ける。

ただし以上三つの記事にはいろいろな問題が含まれている。その問題を解きほぐしなが

ら、女教皇伝説の発生を考えてみたい。まずこの三つの文書の関係である。マルティヌスと前二者の関係は明白ではない。マルティヌスが、女教皇に関するジャンの記述を知っていたとしても、それとは異なったソースを参照した可能性も排除するべきではない。

しかしながら一番大きな問題はこの三つの文書が13世紀に成立したということである。ジャンはメッツ在住のドミニコ修道会士で、彼が『メッツ世界年代記』の大部分を著述したのは、先にも述べたように1250年頃だと考えられている。エティエンヌはフランスのドミニコ修道会士で、1261年に死去した。彼が『称讃に値するさまざまなテーマに関して』を書いたのは1250年から1261年の間であろう。

マルティヌスは1278年に死去したことがわかっている。そして彼がこの著作を書いたのは1265年ころであったと推測されている。女教皇の話が挿入されたのは、その後であるが、そう遠く隔たった後ではないようである。¹¹

マルティヌスは女教皇が登位したとされる855年からはほぼ400年の時を隔てている。ジャンは女教皇の登位を1099年とし、エティエンヌは1100年としているので、150年後に書かれたことになるが、いずれにしてもこれほど昔の歴史事実を書き記すために彼らが利用したのはどのような文書であったのか。女教皇などという前代未聞の出来事を記すのに、まさか彼らが何らの資料をも使わず創作したなどということは想像できない。

もちろん中世にはまじめな意図での偽書はまことに多い。しかしながらまじめに女教皇を捏造する意味などどのように考えてもない。何らかの資料があり、それに基づいてジャンやマルティヌスが女教皇に関して記述したと考えるのが自然である。従って、まずは彼ら

が目を通したであろういくつかの文献中の女教皇の記事を追わねばならない。

女教皇について最初に触れられているのは、彼女の同時代人たる文書館員アナスタシウスの作品中である。彼は教皇伝集成である『教皇の書』の作者と目されている9世紀の学者である。

『教皇の書』の初期写本のひとつ、バチカン写本の中に、マルティヌス・ポローヌスの記事と文字通り同じ内容の記事が書き残されている。しかしその部分を書かれた筆跡は主要な部分を書いた人のものとは別であり、さらに女教皇関連記事はそのページの一番下の余白に書き記されているようである。そのためレオ4世の記述が途中で切れていることになる。つまり女教皇の記事がレオ4世の記事の途中に挿入されているようなかたちになっているのだそうである。この事実により、この記事はおそらく後に書き入れられたもので、むしろマルティヌスの記事を読んだ誰かがそこに挿入したものであろうとの推測が成り立つ。¹²

それ以後のアナスタシウスの写本については、マルティヌスたちが参照したというよりも、マルティヌスが書き残した部分を参考にして挿入したものを無批判に筆写している形跡が濃厚である。それに多くの写本に女教皇の記事が含まれていないことも、¹³アナスタシウスの原本に女教皇の記事が載っていないことを裏書する。

ドンナ・ウールフォーク・クロスが著した小説、『教皇ジョーン』の結末は感動的である。アナスタシウスが女教皇ジョーンについて触れず、歴史の中から抹殺しようとしたのであるが、その稿本を借り受けたアルノルド（実は男装者のアルノルド）がそこにジョーンの

ことを書き入れ、こうしてジョーンが歴史の中に名を残すことになった。¹⁴ 胸打たれる結末であるが、実際は、残念ながら、13世紀以後の書き入れだったという説を疑う根拠はない。

次に女教皇が登場するのは、11世紀まで待たねばならない。マインツ——女教皇が生まれたとされる都市である——の修道院で17年間を過ごしたマリアヌス・スコトゥス(1028-86)の著作、『歴史』のいくつかの写本の854年の条に「8月1日に教皇レオが死去した。彼を継いだのはヨハンナという女性である。彼女は2年5ヵ月と4日間統治した」¹⁵という記述がある。

しかし残念ながら写本の大多数にはこの部分は含まれてはいない。この部分を含んでいる写本はすべて比較的に筆写されたものだそうだし、写本中最古と見なされているゲンブルー修道院の文書保管室にある写本には残念ながらこの記事は載せられていない。¹⁶

12世紀になると3人の年代記作者が女教皇の記事を書き残してくれている。年代的にその最初のもはゲンブルーのシゲベルトゥスのもので、彼は1030年に生まれ1112年か13年に死去したベネディクト派修道会士であった。彼の『年代記』の比較的に後の写本のいくつかの854年の条に「このヨハネスは女であったという噂である。そして彼女を抱き、彼女を身ごもらせたただ一人の友人familiarisだけが女であることを知っていた。彼女は教皇(在位)中に(子どもを)産んだ。それゆえある人々は彼女を教皇のうちには数えない。そのような理由で彼女はその名前に数字をもたない」¹⁷という記述が見える。

この部分はそのほとんどが余白に書かれているようである。また初期の写本には見られない。

そしてシゲベルトゥスの自筆原稿と思われるものの中にはこの記事が見当たらない。¹⁸ これは決定的である。

シゲベルトゥスにやや遅れてフライジングのオッターが『年代記』を著した。彼の年代記の最終巻に教皇のカタログが残されているが、写本のいくつかにおいて、705年から707年の間教皇であったヨハネス7世の名前のうしろに「女」という言葉が書かれているそうである。¹⁹

オッターのリストには年代が書かれていないし、レオ4世からベネディクトゥス3世まで、ヨハネスなる名前の教皇は他にはいないので、おそらく女教皇の話を知っていた人物が誤って書き記したのだと考えられる。

三つ目が『パンテオン』で、これはヴィテルボのゴットフリートによって書かれた。この中で、女教皇は再びレオのうしろに移された。ただし記述は簡単で、「女教皇ヨハンナは数に入れられない」とあるだけである。そしてこの文言もまた初期の写本には記載されておらず、ゴットフリート自身は女教皇の存在についてはおそらく知ってはいなかったと想像される。²⁰

要するに、12世紀以前の記録については、ジャンやマルティヌスが参考にしたであろうと想定される記事が存在していないということになる。では彼らは何を参考にしたのだろうか。

女教皇について何らかの風説が広がっていたことは確かである。エティエンヌが女教皇について書いたのとほぼ同じころ『エアフルトのフランチェスコ修道会の権威による小年代記』が著されたが、その中に次のような記述がある。²¹

もうひとり別の偽教皇もいた。その名前も統治年も知られてはいない。というのも（この偽教皇は）女であり、ローマ人が認めたように、上品な姿形、偉大なる学知、見かけだけではあるが、偉大なる活力の人であった。彼女は男の服を着て、教皇へと選ばれた。そして彼女が教皇在位中に妊娠し孕んでいるとき、悪魔が、集会中に皆の前で教皇に次のことばを叫んでこの事実を知らせた。

教皇よ、父の中の父よ、女教皇の出産を知らせよ。

記述のスタイル、内容からして、これはどうもエティエンヌやマルティヌスらドミニコ会で広がっていた噂とは違うソースに基づいているように思われる。同じ頃ウィーンでヤンセン・エニケルが女教皇について書いたが、これは明らかにマルティヌスを参照していないという。²²

いったい誰が、何のために。それについては不明であるが、しかしある程度信憑性のある話として語られていたことは間違いない。そうでなければ、このスキャンダラスな話を、後に「教皇の犬 (domini cane)」とも呼ばれるほど教皇に忠実であったドミニコ修道会士たちが取り上げるはずがない。もちろん当時ドミニコ会と教皇との間に確執があったことは周知の事実である。²³ しかし教皇個人の攻撃と、教皇体制の攻撃とはまったく次元を異にしている。教皇体制を揺るがすような女教皇の存在を、ドミニコ修道会士たちが語り合っていたとしても、相当信憑性がなければ、ジャンたちも書き記すことはなかったであろう。

とにかくこの伝説はおそらく13世紀にどこかで発生したのだ。そしてそれが書き記され

ることによって、それは事実性を獲得したのだ。とりわけマルティヌスがそれを書き記したこと、正確に言うと、ある人物がマルティヌスの中にこの話を挿入したことが、女教皇伝説の流布に大きく関与した。そしてひとたび発生した伝説は大きな影響力を後々まで与えつづける。

2 伝説の発展

14世紀になるとマルティヌスの記述をその中にとり入れる年代記が数多く登場する。もちろん歴史事実として描かれるのだ。その詳細についてはここで紹介する余裕はない。ここでは歴史的事実としての簡単な記述に満足できず、ひとつの物語に仕上げられたものを紹介しておく。ボッカチオによる『著名な女性たちに関して』の中の女教皇に関する一章である。

ヨハネスはその名からは男であるように思われるが、実際は女であり、その前代未聞の凶太さが彼女を世界中に、そして後世に有名となした。ある人たちがいうには、彼女はマゴンティアクム Magontiacum の出身であり、本当の名前はわかっていない。しかしながら本当の名前がギルベルタだという人たちもいる。ある人々の主張によれば、以下のことがよく知られている。彼女は乙女であったとき若い学生から愛された。彼女は彼をとっても愛していたので、乙女らしい恐れや慎みを捨て去ることができ、秘密のうちに父親の家を出て彼のもとに走ったといわれている。彼女は名前を変え、男の服装をして、恋人に付き従った。彼女が彼とともにイングランドで勉強していた間、彼女はあらゆる人から聖職者と見なされ、文字と愛の勉強にいそしんだ。

彼女の恋人が死んだとき、ヨハネスはよき心を持ち、学問の魅力に引きつけられているのを知っていたので、男の服のままで、誰に属することをも、あるいは彼女が女であるということを悟られることをも拒絶した。彼女は勤勉に学問に執着し、教養の学にも神学にも大いに進歩したので、あらゆる人を凌駕したと見なされた。このようにしてすばらしい知識を与えられて、彼女はイングランドを去り、ローマへと赴いた。そのとき彼女はすでに成熟した年齢に達していた。ローマで彼女は何年間も三科を教え、すばらしい生徒たちを獲得した。学者としての知識に加え、彼女はととても徳高く、聖人の如くであったので、あらゆる人たちが彼女を男と信じた。彼女はととても有名であったので、教皇レオ5世が死去したとき、枢機卿たちの全会一致の投票で教皇としてレオを継ぐよう選出された。彼女はヨハネスと呼ばれた。そしてもし彼女が男であったなら、彼女はヨハネス8世ということになっていただろう。この女性は漁師の王位（教皇座）にのぼることを恐れず、あらゆる神聖なる秘蹟を扱うのを、それらを他の人に与えるのを——これらはキリスト教が決して女には許さなかったものなのだ——恐れず、何年間も教会最高の職位を保持したのであった。

そのとき女が地上でのキリストの代理であった。神は高みからその民に憐れみを賜り、女がそれほど高い地位におり、多くの民を支配し、そのように悪意ある欺瞞で彼らをだますことをお許しにならなかった。そして神はそのような甚だしく厚顔なる女をお見捨てになった。ヨハネスは私生活においてとても徳高かったのであったが、このような悪さをなさしめ、そしてそれに自分を固執せしめた悪

魔にそそのかされて、高い位にのぼりつめた今、彼女は欲望という熱情の虜となった。そして彼女は長い間自分自身を隠してきたのであったが、その欲望を消すのに必要な手だてを欠いていた。そしてその結果、聖ペテロの後継者に秘密裏にまたがり、彼女の淫乱な欲望を鎮める者を見つけるや、教皇はたまたま妊娠することになってしまった。ああなんとという恥ずかしい犯罪！神の忍耐がどれほど大きいものであろうか！しかしその後どうなったのか？長い間男たちの目をたぶらかしてきたこの女はまさに自分が子どもを産みそうだという恥知らずな事実を隠す抜け目なさを持っていなかった。というのは自分が考えている以上に生まれる時期が近かったので、ヤニクムの丘からラテラン宮殿へと聖なる行列をしている際、コロッセウムと聖クレメンス教会の間で、彼女は人々の見守る中、産婆の手助けなく出産したのだった。こうして彼女が恋人をのぞいて他のすべての男たちを欺いていたことが明白になった。そしてそれゆえこのみじめな女は枢機卿たちによって恐ろしい土牢にと放り込まれ、そこで嘆きながら死んだ。

我らが時代に至るまで、彼女の不正行為を非難し、彼女の醜行を永遠とするために、教皇が聖職者や民衆とともに行進する際、半分の所で、ヨハネスが出産した場所に達するとき、その場所を嫌悪するがゆえに、向きを変え、ちがう道をとる。このようにして、その恥多き場を迂回した後、元の通りに戻り、行進を終えるのである。²⁴

ボッカチオがこの物語を書いたのは1361年で、マルティヌスからほぼ100年後であった。ボッカチオは女教皇在位の年代を書かなかっ

た。年代を省くことによって、ボッカチオはこの物語を歴史ではなく、物語として位置づけたのだ。こうしてこの伝説は歴史の世界から物語の世界に入った。そしてほぼ同じ頃ドイツのテーゲルンゼーでも女教皇の物語が書き留められていた。

これは教皇ユッタの物語である。マルティヌスの年代記が偽って主張しているのであるが、彼女はドイツ人ではなかった。若きグランキアはテッサリクス Thessalicus の極めて裕福な市民の娘であった。彼女はすべての注意を知恵へと捧げた。彼女にはするどい精神と知的な性質が与えられていた。勤勉に読書に励んだためこうした性質は増進され、彼女はほどなく大いなる名声を獲得した。そして実際は称讃されている以上であった。学校にはピルキウスという彼女と同年代の青年がいた。彼はこの女の大変な学問好き、彼女の父親の富、そして彼女の飾り気のなさや知恵に気づいていた。年齢のゆえにすでに仲良くなっていた彼らは、愛ゆえにいつそう近いものとなった。彼らは結婚について話し合った。しかし彼らの両親は反対した。お互いに熱情を求める望みが彼らの中で大きくなった。そして日が経ち、彼らが年をとるに従って、彼らはキスをするようになり、我慢できずに抱擁に至った。ついにある日彼らは隠れ家を見つけ、燃えるような思いで一体になった。ヴィーナスの戯れに耽った後、彼らは逃げることにについて話し合った。彼女は女の中で、彼は男の中で、徳と学問において秀でることを欲し、それゆえ彼らはアテネに行くことを決意した。両者ともがもてるだけのお金を持った。彼女は男の衣服を着、男の行儀を身につけた。そして彼らの衣服だけではなく、

その心も彼らを他の者とは大きく異なるものとした。ぐずぐずせずには彼らはアテネへと赴いた。そしてそこで彼らは何年間も勉強した。彼女は神学と学芸においでますます造詣が深くなった。同様に彼はすべての知恵で輝いた。彼らはローマにやって来た。彼らはあらゆる学部で教えた。そしてそこでは学生のみならず、あらゆる学問の博士たちが彼らを聴講しにやってきた。そして彼らの聴講生たちがますます彼らの知識の深みに入っていくに従い、彼らはますます豊かになる富を見つけたのであった。すべての人が、つまりあらゆる学部の博士たちが彼らを崇拜した。すべての市民たちが彼らを崇敬した。ローマ人たちはすべて彼らの性格、慎ましき、そして徳、知恵、世界に広がることになった言葉を称讃した。ついに教皇が死去したとき、この女は例外なしの全員一致の選出によって（教皇に）指名された。ローマ人たちの懇請により彼女は使徒職の最高位にあげられた。彼女の恋人、ピルキウスは枢機卿に任命された。彼らは静かな生活を送った。そして彼らの治世下で全教会は喜んだ。しかし姦淫の状態が根をしっかりと張ることはまれであるし、あるいは芽を出しても、強くはならないし、また強くなっても、猛威を振るうことはないで、それゆえ次のようなことが生じるのだ。以前には決してそうではなかったのだが、偽りの女教皇は妊娠し、そして出産の時を知らずに、荘厳ミサを祝うために、全聖職者とともに、聖ヨハネ・ラテラン教会へと赴いた。しかしコロッセウムと聖クレメンス教会の間で、産みの苦しみに襲われ、彼女は倒れ、出産し、その場で死去した。教皇たちはこの通りをまだ避けている。そして戴冠の前に教皇の男性器官がさらに手で確認される。²⁵

ボッカチオの女教皇はアテネではなく、イングランドで勉強したことになっている。おそらくマルティヌスがヨハネス・アングリクスと書いているのでそう解釈したのであろう。アテネで勉学に励んだというマルティヌスの記述はまったく無視される。その理由は不明である。彼女は「私生活においてとても徳が高かった」と表現されているように、教皇になるまでは肯定的にとらえられている。教皇に登位した後に墮落するのだが、これは彼女自身の罪というより、悪魔のそそのかしがあったからだと言われている。

テーゲルンゼー手稿では、最初にマルティヌス年代記の誤りを指摘しているものの、概ねマルティヌスの叙述に従っている。ボッカチオによれば女教皇は出産の際には死なず、幽閉されたことになっているが、テーゲルンゼー手稿では、マルティヌス同様、女教皇は子どもを産んだ場で死んだことになっている。

テーゲルンゼー手稿で初めて女教皇の恋人の名が明らかにされる。その名前がどこで見つかったかは明らかではない。妊娠は、ボッカチオによれば、悪魔のわるだくみであるが、テーゲルンゼー手稿では、何らかの罰もしくは神による矯正であったかのように考えられているようである。

文章全体から受ける感じは、ボッカチオにせよ、テーゲルンゼー手稿にせよ、事実というよりは、ひとつの昔話であると読者が判断するように書かれている。当時、カトリックが絶対的な権威を失いつつあった頃なので、こういうスキャンダルが語られても、あまり驚かれなかったという時代背景があるのかもしれない。

時代が下って15世紀の末には、ディートリヒ・シェルンベルクがこの女教皇をモデルに

戯曲をものしている。²⁶それを簡単に見ておくことにする。

さて、第一幕。悪魔たちとの歌垣の中にユッタが登場し、「そして私はあなたの忠告に従いましょう」²⁷と歌う。以後のユッタの出世というか、華々しい活躍が悪魔の助力によることがここで暗示されている。しかしこの部分でユッタが悪魔に忠誠を誓ったとは言えない。

舞台は変わって、ユッタとクレリクスなる名前のユッタの恋人が登場する。そして男装して旅立つので、自分のことをIohan von Engellandなる名前で呼べとユッタはクレリクスに要請する²⁸ユッタはそれまでの受け身の女性ではない。むしろユッタがクレリクスを冒険へと誘うのである。彼ら二人は学問のためパリへと向かう。²⁹パリで彼らはあるマギステルのもとで博士となり、³⁰次いで彼らは教皇バシリウスに仕え枢機卿となる。³¹やがて教皇が死に、ユッタは教皇に選ばれる。³²

ローマの参事会員（元老院議員）が息子にとりついた悪魔を祓ってもらおうと息子をユッタの所に連れてくるが、ユッタには悪魔払いができない。³³その息子にとりついていた悪魔がユッタの秘密を暴露して消える。³⁴

さて、次なる場面は天国であり、ここでキリストが女教皇を懲らしめようと決意する。ところがユッタに贖いのチャンスを与えてくれとマリアが取りなし、³⁵その結果、天使ガブリエルがユッタのもとに送られ、即座の贖罪か、永遠の罰かを選べと迫る。³⁶前者を選んだユッタは子供を産んだ後死ぬ。³⁷ユッタの魂はルシファーのもとへと運ばれる。³⁸

マリアと聖ニコラウスに煉獄からの救いを祈る³⁹ユッタのもとへキリストは大天使ミカエルを差し向ける。⁴⁰そしてミカエルによ

てユッタの魂は天国へと運ばれる。⁴¹

以上がシェルンベルク描くところの女教皇の生涯である。劇中、ユッタはパリで勉学するため男装してイングランドの家を出るよう決意する。彼女がそう決意するのは彼女が恋人に促がされたからではない。シェルンベルクのユッタは恋人たるクレリクスにいっしょに行こうと誘いかけるのだ。計画を知ったルシファーはお気に入りの Spiegelglanz と Sathanes を彼女の計画成就のために差し向ける。しかしながらこの場面が悪魔との契約はなされず、彼女がキリスト教を非難することもない。

女性であることを暴露され、現世の恥辱と死を選んだユッタは死後さまざまな苦痛を経験するが希望を失わず、再度のマリアのとりなしの後、ユッタの魂は天国にあげられる。

シェルンベルクに見られる女教皇はこうして最後には救われる。では彼女の罪はどこにあったのか。キリストが彼女を罰しようとした理由は「彼女が厚かましくふるまい、女としての性を忘れたからだし、男の服を着て歩き、このようにして教皇位を受け取ったからだ」⁴²と記される。

あるいは次のような文言もある。「というのはお前はキリストに対して罪を犯した。お前は男と肩を並べ、教皇になった。」⁴³

要するに、ユッタの罪は、男性と肩を並べようとしたことだったのだ。劇中、キリストは、何度もユッタが悪をなしたと非難するが、男性と同等であろうとすること以外に、ユッタがこれといった悪行をおかしたなどは一切書かれていない。ホチキスによれば、ユッタの罪は、教皇になって男性に対する権力を握ろうとしたことであつたとシェルンベルクは見ていたのだという。⁴⁴しかし興味深いこと

に、シェルンベルクには別の面も見られる。

シェルンベルク以外では、学問への旅のイニシヤティブをとったのはたいていが男性のほうであった。女性は男性に従うものであるという見方が暗黙のうちに前提されてしまっている。シェルンベルクの場合、彼らは二人揃ってパリで学問に励むが、頭角を現したのは女性の方であった。女性が学問に深く通暁していることを当然の如く述べている言説から、学問において女性が優れていることは、この時代、男性たちから羨望の目では見られなかったということが見て取れる。

男性の聖人の場合、聖性の獲得は学問とは何の関係もない場合が多い。しかし女教皇の場合、教皇庁で教皇に選出されるに至るまで、その優秀さを認められたのは学問的に秀でていたからである。しかしその学問が神学ではなく、三科、つまり7自由学科の下級三科であった文法、修辞、弁証法であったことは示唆的である。当時の男性の目から見れば、学問の中の学問である神学に関して女性が優秀であることなどあり得なかったのである。

3 否定される伝説

13世紀以後ヨーロッパ中に広まり始めた女教皇伝説は教会をめぐる対立に利用されるようになる。埋もれていたシェルンベルクの戯曲を出版したのは16世紀のヒエロニムス・テレシウスであったが、彼はミュールハウゼンの急進的宗教改革者であり、女教皇伝説を教皇批判に利用した人物であった。⁴⁵そしてこの教会批判のために女教皇伝説を利用する伝統はすでにルターに始まっている。

彼は1510年にアウグスティヌス修道会士としてローマに赴いた。そしてそこで見た光景を次のように表現している。

ローマのとある公共の広場に、実際は女でまさにその場所で子どもを産んだ教皇を記念する石の記念碑が存在している。その石を私自身が見た。そして教皇たちがその存在を認めているのは驚くべきことだと思う。⁴⁶

上に表現されたことだけではなんら教会批判にはなっていないように見えるが、しかしルターのこの『卓上語録』はもちろんカトリック教会が聖職者の結婚を認めていないにもかかわらず教皇のこの出産像を認めるというダブルスタンダードをするどくつく恰好になっているのである。

このルターのテーブルトークを受けて、ルター派の論客は、女教皇の存在こそ「この教会があの大娼婦の座であり、すべての姦淫の母であるということを示している」⁴⁷という議論を展開するに至る。

こうしたルター派からの批判に対しカトリック側は当初なすすべもなく敢えて批判を甘受しなければならなかった。

カトリックの立場は、女教皇によりなされた秘蹟は無効ではあるが、聖なる恩寵の事後の介入により有効性を獲得するというものであった。⁴⁸しかしこの考え方は、恩寵を受けるに際し、聖職者は何の役にも立っていないというルターの主張を支えることになるので、女教皇の問題は早急の解決を迫られることになった。こうしてカトリックの側も女教皇伝説に向き合うことになる。

1562年ヴェローナのアウグスティヌス修道会士オノフリオ・パンヴィニオがプラティナの『教皇伝』を再版したが、このとき、パンヴィニオはプラティナ——教皇就任後の男性器官確認の習慣に対する疑問を始めて書き記した人物——が書いた女教皇の記事に自分の

見解を付け加え、女教皇の實在に疑問を呈した。⁴⁹

彼は次のように主張する。ローマ人は出自が定かではない余所者を教皇に選出するほど愚かではなかったであろうし、神がそうしたことはお許しにならなかったであろう。さらに第二点として、レオ4世とベネディクトゥス3世の間には2週間も空白期間がなかったことを問題とする。実際この間に女教皇が2年に渡って在位したことなど不可能なのだ。第三点として、彼が『教皇の書』の著者と考えていた文書館員アナスタシウスが彼女について言及していないことを重視する。女教皇について書かれている補足は後の挿入であると彼は考えるのである。そしてマルティヌスの年代記が編集された時と彼が考える1250年に至るまで、女教皇に言及している年代記が皆無であることも彼の論議の補強として使用される。

パンヴィニオが用いている論証は以上だけにはとどまらない。1054年にレオ9世がコンスタンティノーブル総大主教に書簡を送り、宦官や女性を高位聖職者に行っていると非難しているが、これは、その当時ローマでは女教皇についてまったく知られていなかったことを示している。また女教皇が研究に励んだというアテネは9世紀頃には、そうした目的には不向きな都市であった。さらに彼女がローマで教えていたという証拠はまったく見つからない。人々がいつも数多くいたところで妊娠中の身を隠しおおせることなど不可能であり、またそれほど長く女性であることを隠しておくことなど信じられない等々、パンヴィニオが展開している議論は現代の女教皇批判の主張をほぼそのまま先取りしているといつて過言ではない。

その後も女教皇の實在性をめぐる論争は続くが、デリングアの『中世教皇に関する物語』⁵⁰によってほぼ決着がつけられたように見えた。ところが1985年にジョン・モリスが『教皇ヨハネス8世——イングランドの女性、別名教皇ジョーン』⁵¹を書き、再び女教皇の實在性を主張した。エミリ・ホープも實在を信じようとする。⁵²二人の女性研究者が女教皇の實在性を主張する根拠は学問的なものであるが、しかしその裏には、クロス描くところのアゴバルドと同じ心性がかいま見られる。つまり男性によって抹殺された女性の業績をなんとか救い出さねばならないという固い決意である。

女教皇伝説は単に奇妙な伝説であったというだけにとどまらない。男性と女性の関係の問題が集約的に表されているのである。

なぜ女教皇の存在自体がスキャンダルなのか。これは単にキリスト教社会における女性嫌悪の結果だと簡単に片づけられる問題ではない。キリスト教社会においても女性支配者はいる。しかし教会ヒエラルヒーにおいては、女性はその最下層の地位にすらつけない。⁵³これはキリスト教自体に内在する問題なのか、あるいは歴史的な問題なのか、その点について検討する必要がある。しかしもはや紙数が尽きた。この問題については異性装とは別の稿を用意する必要があるだろう。

おわりに

男装して学問に励み、教皇にまでのほりつめたとされる女教皇伝説は、もちろん男装の聖女の存在を抜きにしては考えられない。男装することによって、女性は男性と同等でありうるという、女性の場合には期待、男性の場合には恐怖が、中世を通じて存在したので

あろう。しかしこの男装者の物語が、常に男性によって書かれる限り、男装者は最終的には決定的に女性であることを暴露されてしまうのである。男装の聖女も死後の裸体を男性たちにさらすことによって男性であることが否定された。女教皇は出産という女性に特有の行為を公衆のただ中で実行させられることによって、女性であることを暴露される。女性は男装によって男性と同等でありうるという幻想は、この最後のどんでん返しで拒否され、男性たちは安心する。

しかしながら男装の聖女にせよ、女教皇にせよ、その活躍の場は聖界であり、ここではマリアがキリストと並んで確固たる地位を占めている。女性の出番があったのである。しかし男性の場と考えられている騎士の世界に男装の騎士が登場すればどうなるか。次回では、この男装の騎士の物語をとり上げることにしたい。

注

- 1 「世界最初の女性のカトリック司祭」については、Peter Stanford, *The Legend of Pope Joan*, Barkley Books(New York), 1998, p.172ff.
- 2 穴のあいた椅子に関する伝説の実際については、Alain Boureau, *La Papesse Jeanne*, Aubier (Paris) 1988, p.54ff. なお本書には英訳がある。Alain Boureau, *The Myth of Pope Joan*, University of Cicago Press (Cicago and London), 1993, p.46ff. 以下、ブローローからの引用はこの英訳の頁数である。
- 3 Rosemary and Darroll Pardoe, *Female Pope. The Mystery of Pope Jaon*. Aquarian Press (Willingborough), 1988, p.16. ブローローによれば1255年である。Boureau, *op.cit.*, p.107.
- 4 *MGH, SS.* 24, p.514.
- 5 石の上にかかれたことばは両者の間で若干の相

違がある。ジャンの場合、Petre, pater patrum, papissae prodito partumであり、エティエンヌはParce, pater patrum, papissae prodere partumである。

- 6 原文は、Elisabeth Gössmann, >>*Die Päpstin Johanna*<< *Der Skandal eines weiblichen Papstes*, Aufbau Taschenbuch Verlag (Berlin), 2000 (5 Auflage), S. 27, Anm.5.
- 7 エティエンヌは序文で、資料としてジャンを使用したと書いているそうである。(Boureau, p.109)しかし女教皇の話の部分がジャンのみに依拠しているか、他の資料を使ったかは明らかではない。
- 8 マルティヌスには700ほどの写本が存在するそうである。Boureau, *op.cit.*, p.123. Chronicon中の女教皇の記事はマルティヌスが書いたのではなく、その著作が完成された後、誰かの他の人物によって、挿入されたものであるが、誰が挿入したかは不明。おそらくマルティヌスと同じドミニコ修道会士と考えても間違いはなかろう。マルティヌス自身が女教皇については書いていないとしても、ほぼ同時代人が書き入れ、後世の人が、マルティヌスの記載だと信じたが故に、女教皇の話が流布した点を考慮すれば、挿入者をマルティヌスと重ね合わせても許されるであろう。本稿でマルティヌスと記しているのは、このマルティヌスの著作を指し、マルティヌス自身を指しているわけではないことを、ここに断っておく。
- 9 *MGH. SS.* 22, p.377.
- 10 *Ibid.*, p.428.
- 11 ブローローは、1280年から1285年の間と推測している。Boureau, *op.cit.*, p.10.
- 12 Pardoe, *op.cit.*, p.13.
- 13 *Ibid.*, p.14.
- 14 Donna Woolfolk Cross, *Pope Joan*, Ballantine Books (New York), 1996.
- 15 原文は、Gössmann, *op.cit.*, S.51, Anm.35.
- 16 Pardoe, *op.cit.*, p.14.
- 17 原文は、Gössmann, *op.cit.*, S.53, Anm.37.
- 18 Pardoe, *op.cit.*, p.15.
- 19 *Ibid.*

異性装から見た男と女(2)

- 20 *Ibid.*
- 21 MGH SS. 24, p.184. もしかしたらこの記述が女教皇に関するもののなかで最古のものかもしれない。Gössmann, *op.cit.*, S.30. しかしその点についてはいまは何の確証もない。
- 22 *Ibid.*, S. 31f.
- 23 Boureau, *op.cit.*, p.146.
- 24 Giovanni Boccaccio, *Concerning famous women*, translated, with an introduction and notes, by Guido A. Gurarino c.1963. pp.231-233.
- 25 John J. Ign. Döllinger, *Fables respecting the Popes of the Middle Age*, translated, with introduction and appendices by Alfred Plummer. Rivingstons (London), 1871. pp.280-282.
- 26 Dietrich Schernberg, *ein schon Spiel von Frau Jutten*, herausgegeben von Manfred Lemmer. Erich Schmidt Verlag, 1971.
- 27 *Ibid.*, v.165.
- 28 *Ibid.*, v.266ff.
- 29 *Ibid.*, v.243.
- 30 *Ibid.*, v.372ff.
- 31 *Ibid.*, v.543ff.
- 32 *Ibid.*, v.607ff.
- 33 *Ibid.*, v.701ff.
- 34 *Ibid.*, v.751ff.
- 35 *Ibid.*, v.785ff.
- 36 *Ibid.*, v.875ff.
- 37 *Ibid.*, v.1135ff.
- 38 *Ibid.*, v.1157ff.
- 39 *Ibid.*, v.1431ff.
- 40 *Ibid.*, v.1595ff.
- 41 *Ibid.*, v.1683ff.
- 42 *Ibid.*, v.863ff.
- 43 *Ibid.*, v.879ff.
- 44 Valerie Hotchkiss, *Clothes Make The Man. Female Cross Dressing In Medieval Europe*. Garland Publishing (New York and London), 1996, p.79.
- 45 *Ibid.*, p.77.
- 46 Boureau, *op.cit.*, p.235.
- 47 *Ibid.*, p.239ff.
- 48 *Ibid.*, p.245.
- 49 *Ibid.*, p.246.
- 50 注25参照。
- 51 Joan Morris, *Pope John VIII—An English Woman alias Pope Joan*, Vrai Publishers (London), 1985.
- 52 Emily Hope, *The Legend of Pope Joan*, Sisters Publishing (Carlton South Victoria), 1983.
- 53 もちろん教会法でそれは規定されている。一例を挙げると、グラティアヌスには、女性が祭壇の敷物や聖器に触れるのを禁じた条項がある。Aemilius Friedberg, *Decretum Magistri Gratiani in: Corpus Iuris Canonici*, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt (Graz), 1995, Dist. XXIII, c.25, p.86.